

サーサーン王朝の皇帝イデオロギーと ゾロアスター教

——アードウル・グシュナスブ聖火と
タフテ・タクディース玉座の検討から——

青 木 健

は じ め に

プ ロ ロ ー グ——サーサーン王朝の宗教的重心はペルシア州から
アゼルバイジャン州へ——

皇帝叙任の場の変遷

宗教戦争としてのペルシア・ビザンティン戦争

第1章 本稿の仮説

アードウル・グシュナスブ聖火と

タフテ・タクディース玉座

作業仮説

第2章 アードウル・グシュナスブ聖火と

タフテ・タクディース玉座に関する資料

第1節 中世ゾロアスター教・サーサーン王朝史研究の資料状況

第2節 アードウル・グシュナスブ聖火に関する資料

第3節 タフテ・タクディース玉座に関する資料

第3章 資料の内容整理

第1節 アードウル・グシュナスブ聖火に関する資料の内容整理

第2節 タフテ・タクディース玉座に関する資料の内容整理

第3節 資料から構成されるクロノロジー

第4章 サーサーン王朝の皇帝イデオロギーの変遷と

ゾロアスター教思想の影響

第1節 サーサーン王朝の皇帝イデオロギーの2段階変化

第2節 第1期の変容の要因——教祖伝説のアゼルバイジャン化
現象と偶像破壊運動——

第3節 第2期の変容の要因——ホスロー2世による皇帝イデオ
ロギーの創出——

ま と め

エ ピ ロ ー ゲ——聖火と玉座の消滅——

参考文献表

は じ め に

『東洋史研究』第65巻第3号にて「宗教と権力」と題した特集が組まれるに当たり、私のようなゾロアスター教を専門とする宗教学者にまで寄稿の機会を与えて下さった編集部の方々の幅広い目配りに感謝申し上げたい。ユーラシアの各地域・各時代の「宗教と権力」を概観したいとの壮大な意図に筆者がどこまで応えられるか覚束ないが、ゾロアスター教に於ける宗教と権力の相互浸透に関して発表させて頂きたい。

ゾロアスター教が時の政治権力と明白な形で関わり合ったのは、管見の及ぶ限り、歴史上2回しかない。第1回は、3世紀初頭、ペルシア州⁽¹⁾エスタフルのゾロアスター教神官の出自と伝わるアルダフシールが、アルシャク王朝を倒してイラン高原の支配権を手に入れるに及び、そのまま皇帝に即位して、ゾロアスター教を国教に定めた時である。このサーサーン王朝時代の皇帝権力とゾロアスター教神官団の相互依存の関係は、発端は偶発的であったが、以後400年の長きに亘って持続した。第2回は、16世紀後半、ムガル帝国のアクバル皇帝が個人的にゾロアスター教に興味を示し、当時インドに亡命していたパールスィーたちと個人的な接触を持った時である。これは、カリフ制度やスルターン制度とは無縁なモンゴル人が、東方イスラーム世界支配の根拠を古代イランの皇帝思想に求めた動きの一環⁽²⁾で、パールスィーは大いに喜んだものの、アクバル没後は長続きしなかった。

後者については既に専論を発表した経緯もあるので、本稿では前者を取り上げたい。即ち、サーサーン王朝時代に於ける皇帝権力のイデオロギー的基盤と、

(1) 古代ペルシア語名：パールサ州、パフラヴィー語名：パールス州、近世ペルシア語名：ファールス州。時代ごとに使い分けると混乱するので、本稿では、ペルシア州で統一する。

(2) 美術史的観点からの最新の研究としては、Soudavar 2003 参照。

それを擁護するゾロアスター教思想について、管見を纏めたい。サーサーン王朝時代は、同時代の当事者による文献が乏しく、考古学的な遺物、外部から見た資料や後代の資料をパッチワークのように組み合わせて、辛うじて実像を推測できる厄介な時代である。そこで、まずは現在の資料の状況を把握し、現段階で何が問題かを見極めて、それを検討し、最後に確実に言えそうな結論を述べたい。暗中模索状態のサーサーン王朝史研究及び中世ゾロアスター教研究を、確実な基盤の上に一步でも前進させられれば幸いである。

なお、本稿では、パフラヴィー語、アラビア語、近世ペルシア語の資料を用いるが、転写方式は、パフラヴィー語については、D. N. MacKenzie, *A Concise Pahlavi Dictionary*, London, 1971, アラビア語と近世ペルシア語については、『岩波イスラーム辞典』, 岩波書店, 2002年に従った。

プ ロ ロ ー グ

——サーサーン王朝の宗教的重心はペルシア州からアゼルバイジャン州へ——

皇帝叙任の場の変遷：224年にアルダフシール1世が戴冠して以降、皇帝叙任式の磨崖レリーフの集中度から見て、サーサーン王朝皇帝がアフラ・マズダーから地上の支配権を委任される聖地は、ペルシア州だったと考えられる。現存9個の皇帝叙任式の磨崖レリーフのうち、初代アルダフシール1世(r. 224-240)の3つ(アルダフシール・ファッラフ、ナクシェ・ロスタム、ナクシェ・ラジャブ)、第2代シャープフル1世(r. 240-270)の2つ(ナクシェ・ラジャブ、ウエフ・シャープフル⁽³⁾)、第4代ヴァフラーム⁽⁴⁾1世(r. 271-274)の1つ(ウエフ・シャープフル)、第7代ナルセフ(r. 293-302)の1つ(ナクシェ・ロスタム)の合計7つが、ペルシア州に存在する。多くは、馬上の皇帝が敵を倒し、アフ

(3) 近世ペルシア語名：ビーシャープール(Bīshāpūr)。但し、パフラヴィー語名と近世ペルシア語名の音韻が一致しないので、パフラヴィー語名は正しくはバイ・シャープフル(Bay Šābuhr)だった可能性がある。

(4) この皇帝名は、パフラヴィー語名：ヴァフラーム、アラビア語・近世ペルシア語名：バフラームである。本稿では、引用する資料によって、両名を混用する。

ラ・マズダーから帝権の象徴であるファッラフ⁽⁵⁾を授けられる構図である⁽⁶⁾。サーサーン王家はペルシア州エスタフルのゾロアスター教神官の家系と伝わるので、拝火神殿に仕えていた先祖の故地が、そのままアフラ・マズダーから帝権を授与される聖地となったのだと思われる。

ところが、イスラーム時代のアラビア語・近世ペルシア語文献によると、第14代皇帝ヴァフラーム5世時代 (r. 421-39) から、この皇帝叙任式パターンに顕著な変化が見出せる。この点については、既に1946年に、スウェーデンのイラン学者ヴィカンデルが指摘している⁽⁷⁾。即ち、ヴァフラーム5世より後のサーサーン王朝皇帝は、帝都クテスィフォンで戴冠した後に、ペルシア州エスタフルの代わりに、アゼルバイジャン州のシーズ (Shiz はアラビア語地理書での名称⁽⁸⁾)。おそらく、サーサーン王朝時代のパフラヴィー語では Ganzag⁽⁹⁾。13世紀以降のトルコ・モンゴル語では *Soqurluq⁽¹⁰⁾。16世紀以降の近世ペルシア語では Takht-i

(5) アヴェスター語の *xwarənah* / 古代ペルシア語の *farnah* / 近世ペルシア語の *farr*。この語は、ゾロアスター教思想史上で重要な役割を果たしているにも拘らず、不明な部分が多い。語源については、「財福、幸運」、「食物」、「栄光、光輝」など、諸説がある。使用法としては、アヴェスター語のフウルナフは、神々も悪魔もこれを手に入れなくては宇宙創生が叶わないほどの超常のパワーを秘めた何ものかと理解されていた。

サーサーン王朝時代になると、ファッラフとしてパフラヴィー語文献に頻出するようになる。基本的には、①メーノグ諸神によって生命の河に具えられた生命原理、②無始の光明から分化した聖火、である。これに対応して、使用法も2つに分かれる。宗教的には、天から降下したファッラフは、ザラスシュトラの誕生を促す聖なる光として作用し、また、ザラスシュトラ自身のファッラフは、湖に保存されて終末論的3救世主の誕生を促す。これに対し、政治的には、サーサーン王朝の王権の正統性を保証する文様としてレリーフ化された。しかし、レリーフ中のどの文様をファッラフと解釈するかについては諸説ある。

故・伊藤義教氏は、語源的には「栄光、光輝」説を採り、またレリーフ中の円環と同一視する立場から、パフラヴィー語 *xwarrah* を「光輪」と日本語訳されている。しかし、この語の語源とレリーフの解釈に関して現在のところ定説がない以上、本稿では「光輪」を避け、原音のままで提示することにした。

(6) Mosig-Walburg 1982, Cereti 1996, pp. 34-35, 田辺 2002a 参照。

(7) Wikander 1946, pp. 148ff. 参照。

(8) アラビア語のシーズと云う地名は、パフラヴィー語のチャーチャスト (Čēčast) から派生したとされている。Boyce and Grenet 1991, p. 74 参照。

(9) 在証は Markwart 1931, p. 22 及び Daryaei 2002, p. 56 参照。

(10) モンゴル期のタフテ・ソレイマーンについては、本田 1976; 1978 参照。

Sulaymān⁽¹¹⁾へ巡礼するのが慣例になったと伝えられるのである。これによって、5世紀を境にして、皇帝イデオロギーを支えるゾロアスター教思想の地理的中心が、ペルシア州からアゼルバイジャン州に遷ったと推測されている。

また、上述の9つの皇帝叙任式レリーフの残りの2つについては、第10代アルダフシール2世(r. 379-383⁽¹²⁾)と第22代ホスロー2世(r. 591-628)の各1つずつが、クテシフォンからハマダーンに至る幹線道路上のターゲ・ボスターンに彫られている。この皇帝叙任式レリーフの位置の移動からも、サーサーン王朝の宗教的重心が或る時期にアゼルバイジャン方面に遷ったと言えると考えられている。

宗教戦争としてのペルシア・ビザンティン戦争：また、これらの戴冠式レリーフの変遷と併せて、サーサーン王朝とビザンティン帝国が約30年間に互って攻防を繰り返したペルシア・ビザンティン戦争(602-28)の経緯にも注目しなくてはならない。この戦争は、サーサーン王朝ペルシア対ビザンティン帝国と云う国家間の戦争であると共に、ゾロアスター教徒対キリスト教徒と云う宗教間の戦争と云う側面を持つ。

先ず、開戦劈頭に先手をとったホスロー2世は、614年にエルサレムを攻略し、イエス・キリストが磔刑に処せられたと称される「ゴルゴタの聖十字架」を奪取した。ビザンティン帝国側から見れば、国教の象徴を失った敗戦である。更に、ペルシア軍は2手に分かれる。別働隊は進路を南にとり、ビザンティン帝国の穀倉地帯エジプトを制圧した。他方、主力部隊は北上を続け、コンスタンティノーブル対岸のカルケドンまで達して、ビザンティン帝国を滅亡の瀬戸際まで追い込んだ。

これに対し、新たに即位したビザンティン皇帝ヘラクレイオス(r. 610-641)は、通常考えられるシリア・メソポタミア沿いの平地からクテシフォンへ向かう反撃コースを取らなかった。彼は、622年に聖体拝領の儀式を終えると、

(11) 現地については <http://www.sepahbod.com/1403/1140.JPG> 参照。2004年7月23日閲覧。

(12) ターゲ・ボスターン最右翼のレリーフに彫られた皇帝が誰であるかは、正確には確定できていない。Soudavar 2003, pp. 49-52 参照。ここでは、田辺氏の説に従った。

623年、敢えてタウルス山脈沿いに反攻してシーズ（記録上は Thebarimais と表記）を急襲し、その拝火壇（Sebēos によると、Všnasp という聖火の拝火壇）を破壊した⁽¹³⁾。ここにあった「シーズの聖火」自体は、ホスロー 2 世が辛うじて救出し、彼の居城ダストギルド（クテスィフォン近郊）に移転させたものの、この聖地の占領でサーサーン王朝の威信は大いに揺らいだとされる⁽¹⁴⁾。

以上、これを宗教戦争とするならば、ビザンティン帝国から見て、ゾロアスター教徒にとっての「シーズの聖火」は、キリスト教徒にとっての「ゴルゴタの聖十字架」に匹敵する宗教的意義があると捉えられていたことになる。こう考えないと、コンスタンティノープルを放置してまで、敢えてシーズを攻撃しているヘラクレイオスの意図を説明できない。以上のことから、サーサーン王朝の宗教的重心が、7 世紀前半の段階ではシーズにあったことが垣間見られる。

第 1 章 本稿の仮説

アードウル・グシュナスプ聖火とタフテ・タクディース玉座：では、ヴァフラム 5 世以降のサーサーン王朝皇帝が皇帝叙任式後に参詣したとされ、後にはヘラクレイオスの報復の標的になったシーズには、何があったのか？ ヴィカンデルは、この問題を、第19代カヴァード 1 世（r. 488-531）以降のサーサーン王朝皇帝が、東イランの伝統である「カイ」の称号を帯びた時期と重なることに注目して解決しようと試みた⁽¹⁵⁾。彼によれば、この時期にサーサーン王朝皇帝が、エフタル親征に伴って全く異なる伝統に属する東部イラン系のゾロアスター教を導入したことで、参詣の対象がペルシア州からアゼルバイジャン州へ遷ったとされる。しかし、現在では、サーサーン王朝時代のゾロアスター教を地理的に東西に区分する考え方自体が無効になっているし、コイン研究が進展して、カイ称号の初出は遅くとも第17代皇帝ペーローズ（r. 459-484）のコイ

(13) Minorsky 1943-46, 同 1964 参照。

(14) ペルシア・ビザンティン戦争の経緯については、Ostrogorsky 1940, pp. 54-66 及び杉村 1969 参照。

(15) Wikander 1946, p. 151 参照。

ンまで遡ることが証明されたので⁽¹⁶⁾、彼の解決は受け入れられていない。

現在明らかになっている伝説では、シーズには、帝国第2の聖火アードゥル・グシュナスプ（パフラヴィー語では Ādur Gušnasp, アラビア語では Āzar Jushasb, 近世ペルシア語では Āzar Gushasp）を祀った拝火神殿と、サーサーン王朝皇帝の（儀礼的な）玉座を掘り込んだタフテ・タクディースがあったとされている。而して、アードゥル・グシュナスプ聖火及びタフテ・タクディース玉座がサーサーン王朝の皇帝イデオロギーに果たした役割と、5世紀以降のサーサーン王朝の宗教的重心が北西方面に遷ったこととの因果関係については、管見の及ぶ限り、田辺勝美氏の美術史的見地からの試論⁽¹⁷⁾以外に先行研究はない。

作業仮説：そこで、本稿では、ヴィカンデルが一旦は正しく指摘しつつも、彼の解決は無効になってしまったこの問題に対して、以下のような仮説を提出したい。即ち、ゾロアスター教を国教とし、同教の神官出身の皇帝を戴くサーサーン王朝にとっては、皇帝の参詣対象が変更されると云うことは、ゾロアスター教的にも皇帝イデオロギー的にも大きな事件である。そして、物理的な存在として、5世紀以降にシーズのゾロアスター教的・サーサーン王朝的聖性を高めたのは、同地に存在していたアードゥル・グシュナスプ聖火かタフテ・タクディース玉座の2つであると考えられる。

従って、この両者が象徴する宗教的聖性を解明し、それらがサーサーン王朝皇帝を惹き付けたプロセスを見極めることが必要になる。最近のサーサーン王朝時代の皇帝イデオロギーに関する研究としては、Choksy 1988 や Soudavar 2003（特に pp. 41-80）が発表されているものの、前者は『デーンカルド』とコイン、レリーフ、後者はサーサーン王朝初期のレリーフを主たる資料としており、アードゥル・グシュナスプ聖火やタフテ・タクディース玉座には主題的な注意が払われていない。これらがサーサーン王朝後期のゾロアスター教や皇帝イデオロギーとどう関わったかの解明は、研究課題として残されている。本稿では、この両者に纏綿する情報を整理して、最終的には、5世紀以降に変化し

(16) Göbl 1971, p. 50, Table XV 参照。

(17) 田辺 1982 参照。

たゾロアスター教思想とサーサーン王朝の皇帝イデオロギーについて纏めたい。
以上が、本稿の作業仮説であり、立論の方向性である。

第2章 アードゥル・グシュナスプ聖火と タフテ・タクディース玉座に関する資料

第1節 中世ゾロアスター教・サーサーン王朝史研究の資料状況

ところで、そのアードゥル・グシュナスプ聖火及びタフテ・タクディース玉座に関する研究は、1960年代以降、次第に省みられなくなった。その主たる原因は、資料の状況にあると考えられる。中世ゾロアスター教やサーサーン王朝史研究にとって重要と考えられる資料が、1960年代を境に大きく変化したのである。現段階で使用し得る資料の系統を図示すると、以下のようになる。

- ① サーサーン王朝時代に彫られたレリーフ
- ② 同時代に鑄造されたコイン・印章・封泥
- ③ 同時代に執筆されたメソポタミア～シリアのキリスト教徒によるシリア語文献
- ④ 9～10世紀にゾロアスター教神官によって執筆されたパフラヴィー語文献
- ⑤ 更に後代にイスラーム教徒によって執筆されたアラビア語・近世ペルシア語文献

この中で最初に活用されたのは、19～20世紀前半の欧米の東洋学者の目に最も触れやすかった⑤及びやや遅れて④系統の資料である。それらに依拠した代表的な研究成果として、今に至るもサーサーン王朝史のスタンダードとなっている Christensen 1936 や、中世ゾロアスター教研究に先鞭をつけた Wikander 1946 が挙げられる。

しかし、現在では、④と⑤に対する資料的評価は低調である。④は、サーサーン王朝時代の宗教・行政を担ったゾロアスター教神官団の末裔の手になるものであるとはいえ、王朝崩壊後既に300年を経てからの執筆であり、どこまでサーサーン王朝時代の実情を反映しているかの保証はないと考えられるよう

になった。また、⑤は、イスラーム教徒の手になる、更に後代の資料と云う不確定さが付き纏うとされている。

これらに対して、近年に優先的に活用されているのが、同時代資料である①～③である。サーサーン王朝は、政治的には、イラン高原とメソポタミア～東部シリア平原を一体化した帝国である。しかし、宗教文化的には、イラン高原上のアーリア人が信奉したゾロアスター教と、メソポタミア～東部シリア平原のセム人が信奉したユダヤ教、キリスト教、マーニー教などに、2分されていた。しかも、教勢の上では、政治権力のバックアップを受けない東方シリア教会やマーニー教が、却ってイラン高原上まで教線を伸ばす形で推移していた。従って、サーサーン王朝を研究する上では、政治的には疎外されつつも、宗教文化的には次第に優勢になりつつあった③の系統の重要性が明らかになっている¹⁸。最も近年に纏められたサーサーン王朝史資料紹介である Cereti 1995 でも、①～③を重視し、④や⑤には全く触れられていない。

ところが、アードゥル・グシュナスブ聖火やタフテ・タクディース玉座に関する資料は、後述するように、大部分が④と⑤に属し、更に派生的な14世紀の北欧のキリスト教教会の祭壇絵画まで含む。逆に言えば、同時代資料としてこの両者について語っている文献はなく、ごく一部の印章資料がアードゥル・グシュナスブ聖火の名を留めているに過ぎない。

このような訳で、アードゥル・グシュナスブ聖火とタフテ・タクディース玉座は、後期サーサーン王朝時代における皇帝イデオロギーやそれを支える中世ゾロアスター教思想にとって甚だ重要だと思われるにも拘らず、或る時期以降は等閑視されてきた。筆者は、この問題を再び取り上げるに当たり、ヴィカデル以降に少しずつ発見されてきた資料、及び田辺氏の美術的見地からの先行研究の積み重ねを、以下に再確認しておきたい。

第2節 アードゥル・グシュナスブ聖火に関する資料

最初に、アードゥル・グシュナスブ聖火に関する資料を網羅しておこう。同

¹⁸ 但し、東方シリア教会系の殉教者伝が、余りにもキリスト教を美化して伝承している偏向には注意しなくてはならない。Williams 2002 参照。

時代の印章資料や考古学資料と、後代のゾロアスター教徒によるパフラヴィー語資料、イスラーム教徒によるアラビア語・近世ペルシア語資料がある。

同時代のサーサーン王朝の印章資料：1959年までのドイツ隊によるタフテ・ソレイマーン発掘調査の報告書は、1961年に出版された⁽¹⁹⁾。しかし、その後も、これに収録されていない重要な発見が相次いでいる。1963年には、ドイツの考古学者ナウマンが、或る印章を発掘した⁽²⁰⁾。ゲーブルによるパフラヴィー語銘解読「アードゥル・グシュナスプの聖所のモーベド (Magupat i Bagīā ī Ātur i Gušnasp)」は失敗したものの、1967年にフンバッハが「アードゥル・グシュナスプの神殿のモーベド (Magupat i Xānag i Ādur i Gušnasp)」との解読に成功した⁽²¹⁾。これによって、シーズがアードゥル・グシュナスプ聖火を祀る座であったことは、確実にになった。

また、1976年にゲーブルが集成した印章資料の中に、「アードゥル・グシュナスプのフラマードール (Ādur-ī Gušnasp Framādār)」の銘がある。その後、1989年に、ジズランが印章資料に基づいて6～7世紀のサーサーン王朝の地方行政制度研究を発表した。それによると、「フラマードール」とは、サーサーン王朝の地方行政の州／都市／村の3段階のうち、州レベルを管轄する高位の役職であることが判明した⁽²²⁾。つまり、本来ならばシーズを管轄下に収めていた筈のアゼルバイジャン州からは独立して、アードゥル・グシュナスプ聖火の拝火神殿の為に、州長官と同格の長官職が設けられていた訳である。これによって、同聖火がサーサーン王朝の職制上、非常に重要視されていたことが明らかになった。

同時代のサーサーン王朝の考古学資料：シーズでの発見は更に続いた。1970年に、上述のナウマンは、シーズの拝火神殿の聖域 (PD 地区) から、彫像の断片を発掘した。推定復元される彫像は、ほぼ等身大の人間像である⁽²³⁾。この発見によって、シーズの聖域では、アードゥル・グシュナスプ聖火と併せて、何

(19) Der Osten und Naumann 1961 参照。

(20) Naumann 1965 参照。これに写真版 (Abb. 11, 12) も掲載されている。

(21) Humbach 1967 参照。

(22) Gyselen 1989, pp. 13-14, 67 参照。

(23) Huff 1971 参照。

らかの彫像を祀っていたことが明らかになった。

9世紀のゾロアスター教神官によるパフラヴィー語文献：9世紀に生き残っていたゾロアスター教神官が執筆したパフラヴィー語文献『ブンダヒシュン』によると、ゾロアスター教では、エーラーン・シャフル内のペルシア州、アゼルバイジャン州、ホラーサーン州に、3大聖火として神官階級、軍人貴族階級、平民階級の守護聖火が叙任され、帝国の聖地として機能していた²⁴⁾。この3大聖火の総説に続いて、アードウル・グシュナスプ聖火の解説が述べられているので、その部分(TD1 1969, Fol. 51, r. ll. 3-8)を以下に翻訳してみよう。

アードウル・グシュナスプは、カイ・ホスローの世まで、そのようにして、常に世界の守護に当たっていた。カイ・ホスローが、チェーチャスト湖の偶像神殿を破壊した時、(アードウル・グシュナスプは)馬の髭の上に座して、暗黒を撃って光明を為したので、(カイ・ホスローは)遂に偶像神殿を破壊した。そして、同地方で、アサグヴァンド山(Asagvand kōf)に、彼(カイ・ホスロー)は、(諸)拝火神殿(ātaxš gāhīhā)を置いた。馬の髭(buš-i asp)の上にあったので、グシュナスプと呼ぶ²⁵⁾。

即ち、神話的な帝王であるカイ・ホスローが、偶像神殿を破壊した跡に、帝国第2の聖火を建立したとされているのである。

9世紀から13世紀のイスラーム教徒によるアラビア語・近世ペルシア語文献：次に、サーサーン王朝皇帝によるシーズへの巡礼を検討しよう²⁶⁾。以下では、9世紀から13世紀に執筆されたアラビア語・近世ペルシア語の記録を整理したい。

①Ibn Khurdādhbih (d. 885 or 912): *Al-Masālik*

²⁴⁾ 青木 2005 参照。

²⁵⁾ グシュナスプ(Gušnasp)は、雄(Gušn)＋馬(Asp)の合成語。従って、アードウル・グシュナスプは、全体として「雄馬の炎」を意味する。おそらく、ここでは、勝利の神ウルスラグナ(Vrōrayna)の10大化身の1つ「雄馬」に因んで、ガンザグの勝利の炎を「雄馬の炎」と命名したと考えられる。直後の箇所では、同じくウルスラグナの10大化身の1つ「若駒」に因んで、ハマダーンの勝利の炎をアータシュ・カワードーン＝「若駒の炎」と命名している。アゼルバイジャン地方のゾロアスター教聖火には、馬に因んだ命名法が多いようである。

²⁶⁾ Wikander 1946, p. 145 参照。

シーズにはアーザル・ジュシュナスの拝火神殿 (Bayt an-Nār Ādhar Jushnas) があり、これはマジュースにとっての大変な聖地 ('azīm al-qadr 'inda al-Majūs) であった。(サーサーン王朝の) 皇帝は、皇帝叙任の際に、マダーイン (= クテシフォン) から… (中略) …ここへ訪れた (zāra-hu)。 (Ibn Khor-dāhbeh 1967, p. 119, l. 17-p. 120, l. 4)

② **Ṭabarī (d. 923): *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk***

バフラム 5 世 (= ヴァフラム 5 世) は、トルコのハーカーンが侵攻してきた際に、アゼルバイジャンへ遠征し、シーズの拝火神殿で礼拝した。… (中略) …遠征に勝利しての帰途、バフラム 5 世はハーカーンから略奪した莫大な戦利品とハーカーンの妃を、シーズの拝火神殿に寄進した。 (アラビア語テキストは Tabari 1964-65, Vol. II, pp. 865f., ドイツ語訳は, Nöldeke 1973, pp. 99ff.)

③ **Mas'ūdī (d. 956): *Tanbīh wa al-Ishrāf***

アゼルバイジャンのシーズには、… (中略) …大拝火神殿があり、アーザル・フシュ (Āzar Khush) と称されていた。ペルシアの皇帝は、皇帝叙任の際にそこを訪れ (zāra-hu), 崇敬を捧げ、多くの寄進をした (taḥammal ilai-hi al-tuḥaf wa al-amwāl)。 (Mas'ūdī 1967, p. 95, ll. 9-15)

④ **Abū al-Qāsim Firdawsī (d. 1025): *Shāh Nāmāh***

- (1) カイ・ホスローが、アゼルバイジャンにあるアーザル・グシャスプに参詣し、聖火の御前で神に祈った。 (Warner 1905-25, Vol. 3, p. 20)
- (2) 宿敵アフラスィヤーブを追撃して捕捉できなかったカイ・カーウースとカイ・ホスローは、アーザル・グシャスプの拝火神殿に参詣し、身体を清めて、聖火の前で 1 ヶ月間神に祈った。 (Warner 1905-25, Vol. 4, pp. 258-59)
- (3) 神のご加護によって宿願を果たしたカイ・カーウースとカイ・ホスローは、アーザル・グシャスプの拝火神殿に参詣し、莫大な財宝を寄進した。 (Warner 1905-25, Vol. 4, pp. 269-70)
- (4) バフラム 5 世が、アゼルバイジャン遠征の途中で、ノウルーズ祭を祝う為に、アーザル・グシャスプの拝火神殿に参詣した。 (Warner

1905-25, Vol. 7, p. 86)

- (5) バフラーム 5 世が、インド人の妃を伴ってアーザル・グシャスプの拝火神殿に参詣し、その大神官に彼女のゾロアスター教への改宗を依頼した。(Warner 1905-25, Vol. 7, p. 139)
- (6) ホスロー 1 世が、ビザンティン帝国との戦争の際に、アーザル・グシャスプの拝火神殿に立ち寄って、祈りを捧げた。(Warner 1905-25, Vol. 7, p. 250)
- (7) ホスロー 1 世が、ヒヨンとの戦争の為にゴルガーンに出撃する際に、アーザル・グシャスプの拝火神殿に立ち寄って、祈りを捧げた。(Warner 1905-25, Vol. 7, p. 363)
- (8) バフラーム・チュービーンの叛乱に直面したホスロー 2 世が、神のご加護を求めて、アーザル・グシャスプの拝火神殿へ赴く。そこで、神官とともに、『ザンド・アヴェスター』を唱えつつ、叛乱の鎮圧を祈った。(Warner 1905-25, Vol. 8, pp. 283-84)
- (9) バフラーム・チュービーンの叛乱を鎮圧したホスロー 2 世は、大願成就に感激してアーザル・グシャスプの拝火神殿を訪れ、『ザンド・アヴェスター』を唱えつつ、戦勝を報告した。その後、莫大な寄進を行った。(Warner 1905-25, Vol. 8, p. 313)

⑤ **Tha'ālībī Nishābūrī (961-1038): *Ghurār Akhbār Mulūk al-Furs***

- (1) カイ・カーウースとカイ・ホスローは、配下の将軍たちとともにそこ(アゼルバイジャン)へ行き、その諸拝火神殿(Ādharbayjān…buyūt an-nīrān bi-hā)を訪れて、アフラスィヤーブ打倒を神に祈った。(Tha'ālībī 1979, p. 232, ll. 2-4)
- (2) 彼(バフラーム 5 世)は、そこ(=アゼルバイジャン)の拝火神殿(Ādharbayjān…bayt an-nār bi-hā)で祈るべく(li-tanassuk), アゼルバイジャンを訪れ(nahaḍa), そこからアルメニアの平原で狩りをすべく進んだ。(Tha'ālībī 1979, p. 558, ll. 7-9)

⑥ **Yāqūt al-Rūmī (1179-1229): *Mu'jam al-Buldān***

シーズには、アーザル・ハシュ(Āzar Khash)もあり、この神殿はマジ

ユースにとっては偉大である。(サーサーン王朝の) 皇帝が皇帝叙任する際は、ここへ参詣した。マラーガやその地方の人々は、この地点をカズナー (Kaznā) [又はガズナー (Gaznā)] と呼んでいる。アッラーは最もよく知り給う。(Jacut 1994, Vol. III, p. 356, ll. 4-6)

第3節 タフテ・タクディース玉座に関する資料

次に、タフテ・タクディース玉座に関する資料を網羅しておこう。同時代の印章資料やパフラヴィー語文献には記載がなく、全て後代の伝承である。

ギリシア語・ラテン語文献資料：ギリシア語・ラテン語文献資料については、筆者は直接解読できないので、専ら Herzfeld 1920, Ackerman 1937, L'Orange 1953, Schippmann 1973, pp. 309-57 などの先行研究に依拠した。それらによると、以下の4人が、タフテ・タクディース玉座に言及している。

- ①Nikephoros (d. 829)：ホスロー2世は自己の神格化の為に、玉座の間ではなく拝火神殿の屋上に、日月星辰に圍繞されて戴冠する自分の像を建立した。
- ②Georgios Monachos (843-67)：Nikephoros を繰り返しているに過ぎない。
- ③Ado of Vienna (d. 874)：彼の殉教伝によると、この建物は馬の力で、中心軸の周囲を回転する構造になっていた。
- ④Theophanes を継承した Cedrenus (11世紀後半)：彼によると、ヘラクレイオス帝は、ガンザカ（シーズの近郊と考えられる。ミノルスキーは、現在のレイランに比定している）を落とした後、そこのドーム型天上を頂いた宮殿で、日月星辰に圍繞されて戴冠するホスロー2世像を見ている⁽²⁷⁾。

アラビア語・近世ペルシア語文献資料：Ackerman 1937によると、後代のイスラーム教徒によるアラビア語・近世ペルシア語の資料は、それぞれ1つずつある。

①Abū al-Qāsim Firdawsī (d. 1025): *Shāh Nāmāh*

タフテ・タクディース玉座はファリードゥーンの時代に造られ、イーラジ、マヌーチフル、カイ・ホスロー、ルフラースプ、グシュタースプと伝

(27) L'Orange 1953, pp. 21-22 参照。

世された。歴代の皇帝は、金銀象牙など、何らかの方法でタフテ・タクディースを飾り立てた。また、グシュタースプは、ジャーマースプに命じて土星から月に至る絵を描かせた。しかし、無知蒙昧なアレクサンダーが、これを破壊してしまった。

それで、アルダシール 1 世は、タフテ・タクディースの名前は知っていたが、それがどんなものか分からなくなってしまう、即位の際に別のものを造った。ホスロー 2 世に至って、これを元通りに再建する決意を固め、イラン中の工匠を集めた。玉座の半面は聖火に向き、残る半面は貴族たちに向いた。天井は12宮や恒星天を観賞できるように設計され、無比の宝石類で飾られた。皇帝の御感は完璧だった。(Warner 1905-25, Vol. 8, pp. 391-6)

②Tha'ālībī Nishābūrī (961-1038): *Ghurār Akhbār Mulūk al-Furs*

ホスロー 2 世が集めた宝物について。それらの中の 1 つは、イーワーン・キスラーとして知られる、マダーインのドームである。(…中略…) 更に、それらの中の 1 つは、タフト・タークディース (Takht Tāqdīs) である。これは、象牙とインド産のチーク材で作られた玉座で、背凭れと手摺は銀と金で作られている。縦は180腕尺、横は130腕尺、高さは15腕尺である。(…中略…) また、そこには、日中の時間の知識を告げる機械があった。また、それ (玉座) は、1 年の四季に応じて、4 枚の絨緞—金や真珠で飾られた—で覆われた。(Tha'ālībī 1979, p. 698, l. 4-p. 699, l. 8)

タフテ・タクディース玉座のレプリカ？ ターゲ・ボスターンのホスロー 2 世大洞：スウェーデンの美術史学者リングボムによると、タフテ・タクディース玉座の原形は、ターゲ・ボスターンのホスロー 2 世大洞に見出せると云う。彼に従えば、ホスロー 2 世はタフテ・タクディース玉座を造営するに当たって、ミニチュア版のプロトタイプをターゲ・ボスターンに彫ることを命じた。それがターゲ・ボスターンの大洞であり、ここから逆算してタフテ・タクディース玉座の構造を推測出来るとする^{②8}。リングボムは、この仮説に沿って、ター

②8 Ringbom 1958, pp. 347-357 参照。

ゲ・ボスターンの大洞を拡大した形のタフテ・タクディース玉座想定図を描いている⁽²⁹⁾。

また、田辺氏は、この仮説を逆転させ、ヘラクレイオス帝によってタフテ・タクディースが破壊された後に、サーサーン王朝の権威を示す為の模造品として、ターゲ・ボスターンが造営されたとしている⁽³⁰⁾。この場合、ターゲ・ボスターンの大洞のレリーフに示された皇帝像は、従来考えられていたようなホスロー 2 世ではなく、彼の孫のアルダフシール 3 世 (r. 628-29) の像になる。

筆者は美術研究には暗いので、ターゲ・ボスターンがタフテ・タクディースのレプリカであって、ターゲ・ボスターンから逆算してタフテ・タクディースを復元した図が正確であるかどうかは、判断できない。ここでは、学説を紹介するにとどめる。

銀器に描かれたタフテ・タクディース玉座：サーサーン王朝時代の銀器の中に、タフテ・タクディース玉座を描いたとされるものが、2 枚見出されている。1 枚は、アッカーマンが指摘し⁽³¹⁾、ノルウェーの美術史学者ロレンジが確認したもので⁽³²⁾、ベルリンの Staatliche Museum 所蔵のブロンズ盆である。もう 1 枚は、田辺氏の指摘によると⁽³³⁾、Grabar 1967, p. 100 に写真が掲載された、所有者匿名の銀器である。

筆者は美術史学者ではないので、これらに描かれた建造物がタフテ・タクディース玉座に相当するのかどうか判断しかねるが、参考までに挙げておく。

14世紀ノルウェーの絵画：ペルシア・ビザンティンの30年戦争は、キリスト教徒にとっては伝説的な勝利として語り継がれた。戦争の経緯は、十字軍時代を経た14世紀初頭に、ノルウェーの Nedstryn の教会の祭壇に、8 連の絵画としてカラーで描かれた。これは、現在では Nedstryn 1300-1325 として、ノルウェーのベルゲン大学博物館に所蔵されている⁽³⁴⁾。

(29) Rongbom 1958, p. 381, fig. 196 参照。

(30) 田辺 1982, p. 93; 2002b 参照。

(31) Ackerman 1937, p. 107 参照。

(32) L'Orange 1953, p. 24-27 参照。

(33) 田辺 1980, p. 71 参照。

(34) <http://www.kongshirden1308.no/old/kilder/frontaler/nedstryn.html> で公開されている。

この8連絵画は、ホスロー2世率いるペルシア軍がエルサレムを後略し、聖十字架を奪うシーンから始まる。その後、ホスロー2世がシーズの玉座の上で聖十字架を翳すシーン、ヘラクレイオス帝がシーズへ反攻するシーン、十字軍（のように描かれた）騎士たちが玉座の上のホスロー2世を斬殺するシーン（これは史実とは異なる）と続き、ヘラクレイオス帝が聖十字架を奪還してエルサレムへ凱旋するシーンで終わる。この中で、「玉座上のホスロー2世」のシーンに、タフテ・タクディース玉座らしきものが描かれている。

第3章 資料の内容整理

第1節 アードゥル・グシュナスプ聖火に関する資料の内容整理

先ず、アードゥル・グシュナスプ聖火に関する資料から確認できる内容を整理しよう。

①遅くともサーサーン王朝後期には、アードゥル・グシュナスプ聖火はシーズに祀られていた。この聖火はサーサーン王朝にとって非常に重要だったらしく、この聖火の拝火神殿の為に州長官級の高官が任命されていた。

②サーサーン王朝時代のシーズの拝火神殿の聖域では、アードゥル・グシュナスプ聖火との時代関係は不明だが、何らかの等身大の彫像が祀られていた。

③9世紀のゾロアスター教神官の神学では、サーサーン王朝内に3大聖火が燈されていた。アードゥル・グシュナスプはそのうちの第2位で、軍人貴族階級の守護聖火である。また、同聖火は、カイ・ホスローがチェーチャスト湖畔の偶像神殿を破壊した後に、同地方に安置されたと伝えられている。

④10世紀以降の資料としては、合計6人のイスラーム教徒がアーザル・グシュナスプ聖火に言及している。その中で、イブン・フルグードビフ、マスウディー、ヤーカートに拠れば、サーサーン王朝の皇帝が戴冠式直後にクテスィフォンからアゼルバイジャンのシーズに参詣すると云う伝承は、かなり一般的

2006年2月28日閲覧。また、この資料のカラー版は、ベルゲン大学の Michael Stausberg 教授からご送付頂いた。記して感謝したい。

になっていた。

⑤また、タバリー、フェルドゥースイー、サアーリビーに拠れば、シーズ参詣は、戴冠式以外でも、出陣前の戦勝祈願に際して行われていた。

⑥更に、フェルドゥースイーとサアーリビーは、サーサーン王朝皇帝の中でも特にバフラーム5世とアードゥル・グシュナスプ聖火を関連付けている。彼らによると、バフラーム5世は、皇帝叙任式や戦勝祈願とは関わりなく、ノウルーズ祭、王妃の改宗、アルメニアでの狩猟の際などに、シーズに参詣したとされる。

⑥叙任式の際にシーズまで参詣したとされる最古の皇帝は、伝説的な存在であるカイ・カーウースやカイ・ホスローを除けば、バフラーム5世である。

第2節 タフテ・タクディース玉座に関する資料の内容整理

次に、タフテ・タクディース玉座に関する資料から確認できる内容を整理しよう。

①後代の文献資料の殆どが、タフテ・タクディース伝説をホスロー2世と関連付けている。フェルドゥースイーのみが、ホスロー2世は古代ペルシアの伝統に即してタフテ・タクディース玉座を建設したと記述している。しかし、ハカーマニシュ王朝とサーサーン王朝の間には550年以上もの懸隔がある。この為、ホスロー2世が突如としてハカーマニシュ王朝の玉座を復活させたとするフェルドゥースイーの記述は、説得力に乏しい。そのような伝説があったのは事実かも知れないが、実際にはホスロー2世の発意によって、7世紀前半にシーズに建造されたと考える方が自然である。

②タフテ・タクディース玉座の構造については、文献資料に色々な説明がある。ニケフォロスによると、シーズの拝火神殿と近接した建造物とされる。アドによると、馬の力で建造物ごと回転する仕掛けが施されていた。セドレヌスによると、星辰に圍繞されたホスロー2世像が飾ってあった。フェルドゥースイー、サアーリビーによると、星辰崇拜の為の仕掛けや時を刻む装置が施されていた。それぞれ矛盾する報告ではないので、これらを信用するなら、タフテ・タクディース玉座は、シーズの拝火神殿に近接して、星辰崇拜の为天体

観測装置を備え、その脇にはホスロー2世の銅像が聳えていたことになる。

因みに、同じ資料に依拠した先学の結論は、次の通りである。ヘルツフェルトは、タフテ・タクディース玉座を、「機械仕掛けの巨大な時計」と解した³⁵⁾。アッカーマンは、同玉座建設の理由を「サーサーン王朝皇帝が、アレクサンダー大王によって破壊されたハカーマニシュ王朝皇帝の百柱の間の玉座を再建する為」と考え、実物は「約 100m×65m×7.5m のサイズで、馬の力で回転する巨大な半円型の本製ドーム」と推測した³⁶⁾。

③ターゲ・ボスターンのホスロー2世像には、特に星辰崇拜や何かの機械仕掛けと関連する兆候は（素人目には）見られない。ターゲ・ボスターンから類推したとするリングボムの復元図には、ホスロー2世の頭上にしっかり日月が描かれているものの、これは彼の想像上の産物のようなものである。

④2枚の銀器に描かれた建造物は、もしこれがタフテ・タクディース玉座を写したものだとしても、外から四角四面の外壁を描いたもので、内部の構造がどうなっているかは窺えない。従って、宗教的な機能を類推するには至らない。

⑤14世紀ノルウェーの絵画の中の1枚、「ホスロー2世がシーズの玉座の上で聖十字架を翳すシーン」では、ホスロー2世の右肩上に太陽、左肩上に月が描かれ、城壁の上には拝火壇らしきものも確認できる。ヨーロッパに流入したホスロー2世の視覚イメージでは、彼は日月と密接な関係にあったことになる。

第3節 資料から構成されるクロノロジー

以上の資料から、サーサーン王朝皇帝の叙任式図、アードウル・グシュナスブ聖火、タフテ・タクディース玉座に関する事実関係について、以下のようなクロノロジーを描ける。それぞれ、「事実」と「後世の伝説」と「研究者の仮説」を区別する為に、各項目の末尾に（事実）、（伝説）、（仮説）と記した。

年代不明：ゾロアスター教神学に拠れば、カイ・ホスローがチェーチャスト湖畔の偶像神殿を破壊し、そこにアードウル・グシュナスブ聖火を安置した（伝説）。

³⁵⁾ Herzfeld 1920 参照。

³⁶⁾ Ackerman 1937 参照。

年代不明：カイ・カーウース、カイ・ホスローが、戦勝祈願の為にアードゥル・グシュナスブ聖火に参詣した（伝説）。

3 世紀：初期のサーサーン王朝皇帝の叙任式レリーフは、神から帝権の象徴ファッラフを手渡される形式のもので、ペルシア州に集中している（事実）。

4 世紀末：アルダフシール 2 世が、突発的にターゲ・ボスターンに皇帝叙任レリーフを造営した（事実）。これは、サーサーン王朝の皇位継承に絡むイレギュラーなレリーフである（田辺氏の仮説³⁷⁾）。この段階では、帝権を保証する聖地はアゼルバイジャン方面へシフトしつつも、帝権の象徴は依然としてファッラフとして示されている。

5 世紀前半：ヴァフラム 5 世が、ペルシア州の代わりに、シーズのアードゥル・グシュナスブ聖火に熱心に参詣を始める（伝説）。この時は、宗教的な清浄儀式やノウルーズの祝祭目的で参詣するケースもあった（伝説）。この頃から、ファッラフを磨崖レリーフとして表現する慣習が止む（事実）。

年代不明：アードゥル・グシュナスブ聖火の拝火神殿の聖域には、等身大の何らかの偶像も祀られていた（事実）。しかし、聖火と同時代なのか、伝説と同様に偶像→聖火の置換があったのかは、不明である。

↓：少なくともサーサーン王朝後期までには、アードゥル・グシュナスブ聖火の拝火神殿には州長官級の高官が任命された（事実）。

↓：次第に、サーサーン王朝の皇帝の同聖火への参詣目的は、2 つに絞られてくる。第 1 に、皇帝叙任式の後に同聖火へ参詣した（伝説）。第 2 に、軍事的勝利を祈願する為に同聖火へ参詣した（伝説）。

³⁷⁾ 田辺 1985 参照。

- 7世紀前半：ホスロー2世が、アードゥル・グシュナスプ聖火の拝火神殿の脇に、タフテ・タクディース玉座を造営した（伝説）。それは、星辰崇拜や文観測の装置を備えていた（伝説）。また、彼は、帝権の象徴をファッラフとする伝統を復活させ、ターゲ・ボスターンにレリーフを造営している（事実）。これは、タフテ・タクディース玉座のプロトタイプである（リングボムの仮説）。
- 623年：ビザンティン帝国のヘラクレイオスが、ゴルゴタの聖十字架を略奪された報復としてシーズに侵攻した（事実）。そして、アードゥル・グシュナスプ聖火の拝火神殿とタフテ・タクディース玉座を破壊した（事実）。
- 628年：ホスロー2世の2代後に即位したアルダフシール3世は、帝権の象徴であるタフテ・タクディース玉座を再建しようとして、ターゲ・ボスターンにミニチュア版を造営した（田辺氏の仮説＝リングボムの仮説の逆）。
- ↓：サーサーン王朝期または同王朝崩壊直後のペルシア銀器には、タフテ・タクディース玉座が彫られている（アッカーマン、田辺氏の仮説）。
- 9世紀：ゾロアスター教神学に拠れば、アードゥル・グシュナスプ聖火は「軍人貴族階級の守護聖火」で、エーラーン・シャフルにある最高レベルの3大聖火の中の第2位に位置づけられる（事実）。
- 14世紀：この時期のノルウェーのキリスト教教会絵画でも、タフテ・タクディース玉座が描かれている（事実）。

第4章 サーサーン王朝の皇帝イデオロギーの変遷と ゾロアスター教思想の影響

第1節 サーサーン王朝の皇帝イデオロギーの2段階変化

上記のクロノロジーから、サーサーン王朝の皇帝イデオロギーの変容に関し

て、以下の2段階が確認される。

第1期：先ず、3世紀末から5世紀前半に至る100年強の間に、サーサーン王朝の皇帝イデオロギーに関する2つの変化が、同時並行的に進行している。

第1に、帝権を保証する聖地の変化である。3世紀末から4世紀末に至る間に、ペルシア州からアゼルバイジャン州方面へシフトし、5世紀に至ってシーズの重要性が定着する。

第2に、磨崖ファッラフ・レリーフの造営中止である。4世紀末までは、サーサーン王朝皇帝は神からファッラフを授けられ、それを視覚化する作業が行われていた。しかし、5世紀から7世紀前半まではこの作業が消滅した。そして、それに代わるようにして、5世紀以降には、大聖火へ参詣することで帝権が保証される慣行が確立した。

第2期：続く転機は、7世紀前半のホスロー2世時代に集中的に訪れる。彼は、帝権を保証する聖地に関しては依然としてシーズに固執していたが、帝権を保証する象徴については、再びアフラ・マズダーからファッラフを授与される伝統を復活して、それをターゲ・ボスターンに視覚化している。更に、シーズに固執するとは云っても、アードゥル・グシュナス聖火の拝火神殿の脇にタフテ・タクディース玉座を造営し、自分自身の銅像を安置してそれを日月星辰で装飾している。

以上のように、サーサーン王朝の皇帝イデオロギーの変容を2段階に纏めたので、以下では第1期、第2期の変容の要因をゾロアスター教思想の角度から考察したい。資料の不足もあって十全な解明は期し難いが、出来るところまで問題解決の糸口を見付けたい。

第2節 第1期の変容の要因

——教祖伝説のアゼルバイジャン化現象と偶像破壊運動——

第1期の2つの変化は、聖地の変遷が先行し、それに続けて象徴の変化が起こっていると見る事が出来る。問題は、5世紀のイランで何が起こったかである。この点で、カヴァード1世(r. 488-531)のエフタル遠征を転換期と見たヴィカンデル説は、やや年代設定を遅らせ過ぎた感がある。初めてこの問題を

指摘した榮譽は担うものの、やはり今日では受け入れられない説だろう。

①**教祖伝説のアゼルバイジャン化現象**：筆者は、聖地の変遷については、ゾロアスター教の教祖伝説の変化が関係していると考えている。即ち、ヴィカンデル以降のゾロアスター教研究においては、教祖ザラスシュトラ・スピターマの出生地論争について、大きな進展があった。この問題に関する資料を初めて網羅したのは、アメリカのイラン学者ジャクソンの研究である。彼は、Jackson 1965（初版は1898）において、『イラン版ブندگانヒシュン』がアルヤナ・ワエージャフをアゼルバイジャンと記述していること、イスラーム期の資料の多くがザラスシュトラの出生地をオルミーエ、シーズまたはライに比定していることなどから、当然、教祖の出身地をアゼルバイジャン地方と結論付けた³⁸⁾。

しかし、イタリアのイラン学者ニョリによる Gnoli 1967; 1980 などの研究によって、『アヴェスター』に見られる教祖の活躍地は東部イランのどこかに限られること、教祖伝説を東部イランからオルミーエ、シーズまたはライに遷したのはサーサーン王朝時代の神官団の人工的な工作だったことが明らかになった。ジャクソンが網羅的に蒐集した伝説は、サーサーン王朝時代の神官団の思惑含みで創作されたものだったのである。

この教祖伝説のアゼルバイジャン化に続いて、Gnoli 1967, pp. 115-116; 1971; 1980, p. 223 に拠れば、ゾロアスター教の聖地全般がイラン東部から西遷する傾向があった。例えば、ケレサースパ伝説がカーヴリスターンからダマーヴァンドへ、アードウル・ファッローバイ聖火がカーヴリスターンからカーリヤーンへ移植されたとされる³⁹⁾。

そこで、筆者は、このようにヴィカンデル以降に明らかにされたゾロアスター教思想史上の「教祖伝説のアゼルバイジャン化現象」が、400年代の「帝権を保証する聖地」のアゼルバイジャン地方への変遷に深く関与したと考えている。つまり、アゼルバイジャンの地形が西部イランの中では偶々教祖伝説の

³⁸⁾ Jackson 1965, pp. 193-205 参照。

³⁹⁾ Gnoli 1971（特に pp. 240-241）参照。但し、アードウル・ファッローバイ聖火がカーヴリスターンからカーリヤーンへ遷ったとの説に就いては、必ずしも鵝呑みに出来ない。青木 2006 参照。

地形と一致しており、その為に先ず教祖伝説がアゼルバイジャン化し、それに伴って他の東部イランのゾロアスター教聖地もアゼルバイジャンへ遷った。そして、西部イランを本拠地とするサーサーン王朝の支配が安定すればするほどこのプロセスが加速し、400年代に至って、「教祖生誕の地アゼルバイジャン」の聖性が「王朝発祥の地ペルシア州」の聖性を凌いだと考えられる。

②**偶像破壊運動**：次に、磨崖ファッラフ・レリーフの造営中止と大聖火への参詣慣行の確立の検討に移ろう。チョクシーも前者の事実に着目して、神官階級と貴族階級の台頭を原因として挙げている⁽⁴⁰⁾。しかし、筆者は、アードゥル・グシュナスブ聖火は偶像寺院の破壊後に成立したとするゾロアスター教神学上の伝説から、この一連の変化の背景には、サーサーン王朝時代の偶像破壊運動があるのではないかと考えている。この偶像破壊運動については、上述のジャクソンが、1914年にパフラヴィー語文献中の言及を集成して初めて考察した⁽⁴¹⁾。彼に拠れば、ゾロアスター教は終始一貫して偶像崇拜を拒んできたことになるが、これも9世紀のパフラヴィー語文献の記述を全面的に信用したものである。

続いて、イギリスのイラン学者メアリー・ボイスが、1975年にゾロアスター教の偶像破壊運動に関する専論を発表した⁽⁴²⁾。彼女によると、もともと偶像崇拜の観念のないゾロアスター教にそれが導入されたのはバビロニアの影響であり、これがヘレニズム時代に更に増幅された。やがて1世紀頃に反動として「イコンを偶像から聖火へ変更する」偶像破壊運動が起こり、最終的に6世紀以前には偶像破壊運動が勝利を収めたと云う。しかし、偶像破壊運動に関して文献上確実に年代を特定できるのは、アルメニアでアルダフシール1世が推進したとの記述と、6世紀の法律文書だけであり、サーサーン王朝下でどのようなプロセスを辿ったのか、明確には分かっていない。

ゾロアスター教における偶像崇拜の研究が大きく進展したのは、中国国内で多くのソグド人墓が発掘された1990年代末葉からである。これまでに、

(40) Choksy 1988, p. 49 参照。

(41) Jackson 1914 参照。

(42) Boyce 1975 参照。

1999年に山西省太原（旧・并州）で発掘された隋虞弘墓（592年）

2000年に西安龍首原で発掘された北周安伽墓（579年）

2003年に西安未央区で発掘された北周史君墓（580年）

2004年に西安北郊坑底寨村北で発掘された北周康業墓（571年）

が発表され、サーサーン王朝の領域では完璧に破壊されてしまった或る時期までのゾロアスター教の偶像が、ソグド人の手によって中国で遺されていたのを見ることが出来る⁴³⁾。勿論、イラン本国のゾロアスター教の曝葬に対してソグド人のゾロアスター教が土葬を実行するなど、教義の根幹に関わる部分での相違も大きく、北京大学の榮新江が指摘するように、「波斯的祆教」と「粟特祆教」を安易に同一視することは出来ない⁴⁴⁾。しかし、それでも、拝火壇の図やそれに仕える半神半鳥の神官の図などは、ある程度、イラン本国で湮滅されたゾロアスター教美術を知る手掛かりにはなる⁴⁵⁾。また、これらが全て6世紀に描かれたと云うことは、偶像破壊運動の終局を従来考えられていたよりもかなり後期に置く根拠になる。

そこで、筆者は、帝権を象徴するアイコンについても、この偶像破壊運動の影響で、5世紀前半に大きな変動があったのではないかと考えている。即ち、4世紀以前には皇帝叙任式の場合はペルシア州と伝わるが、ここでは帝権を象徴するのは大聖火ではなく磨崖レリーフに刻まれたファッラフであり、それがやがてアードウル・グシュナスブ聖火に置換され、偶々上述のように地理的にもアゼルバイジャン州へ遷ってしまったのである。ただ、この説明は、シーズで発掘された人間大の彫像が聖火と平行して祀られていたのか、それとも、その破壊後に聖火に置換されたのが明確ではない以上、未解決の問題を残している。筆者は美術史や考古学に専門外なので何とも言えないが、この方面での研究の進展が待たれる。

43) 一覧表として、施 2004 参照。これに収録されていない康業墓については、http://big5.xinhuanet.com/gate/big5/news.xinhuanet.com/newscenter/2005-03/30/content_2762185.htm 参照。

44) 榮 2003, p. 385 参照。

45) 姜 2004 の巻頭カラー写真参照。

以上、第1期の変容については、ゾロアスター教思想史上の「教祖伝説のアゼルバイジャン化現象」と「偶像破壊運動」に注目して一応の説明を試みた。尤も、これはあくまで試論であって、資料の少ないサーサーン王朝時代の実情を歴史的考証の域内で厳密に実証することは、極めて難しい。ただ、当時の宗教事情を考慮して組み立てられた、可能な仮説の1つである。

第3節 第2期の変容の要因

——ホスロー2世による皇帝イデオロギーの創出——

第2期の変容は、聖地の地理的条件は変わらず、聖地シーズにホスロー2世が独自の要素をどんどん付加していったことによるように考えられる。そして、既存の研究が明らかにしているところでは、ホスロー2世期のゾロアスター教には、特に目立った宗教的な動きは伝わっていない。寧ろ、ホスロー1世からホスロー2世に至る時代は、政治的・軍事的な活動が華々しかった時代である。

そこで、筆者は、この変容は、第1期のようにゾロアスター教思想の変容が皇帝イデオロギーに影響を与えたのではなく、皇帝イデオロギーが独自の発展を示した結果ではないかと想定している。即ち、ホスロー2世は税制改革・軍制改革に成功した祖父ホスロー1世の成果を継承し、それを思う存分に外征に振り替える余裕を持った多幸な皇帝だった。また、ホスロー2世のコインを研究した Daryaee 1997 によると、彼は即位当初の591年に將軍ヴァフラム・チョービーンの帝位篡奪に遭って、反撃の為の新たな皇帝イデオロギーを創出する必要性に迫られていた。この幸運と試練を経て即位したホスロー2世が、対ビザンティン帝国戦争に関して王朝始まって以来の成功を収めたのである。2度に亙る軍事的成果の故に、皇帝権力は嘗てないほどに上昇した筈であり、同時に前代とは異質のものに変貌したと考えられる。おそらく、ゾロアスター教神官団の掣肘を受けることが少なくなって、前代までのようなゾロアスター教に依存する皇帝イデオロギーからの脱却を図ったのではないだろうか。

それは、端的には、ターゲ・ボスターンのホスロー2世レリーフに看取できる。ここでは、皇帝専用マントを纏ったホスロー2世が、ゾロアスター教の神官服を着用したアフラ・マズダーよりも一段上位の台座に立ち、下からファッ

ラフを手渡されているのである。これは、アフラ・マズダーと皇帝が同格だった初期のベルシア州の磨崖レリーフ群に比べると、かなりの変容である。田辺氏の解釈の通り、皇帝権がゾロアスター教神官団の上位にあることを示していると考えられる⁽⁴⁶⁾。

また、交戦中にホスロー 2 世からヘラクレイオスに宛てた反キリスト教的挑戦状が、アルメニア語訳で伝存している。それによると、ホスロー 2 世は自ら「神々の最愛の者、地上の主にして王、偉大なるアフルマズド（オフルマズドのアルメニア語音写）の子」と名乗っている⁽⁴⁷⁾。残念ながらパフラヴィー語原文は明らかでないが、アルダフシール 1 世のナクシュ・ロスタム碑文やシャープフル 1 世のナクシュ・ラジャブ碑文に見られる皇帝の自称「神々の似像（または血統）の者（ke čīhr az Yazadān）」と比べると、明らかにエピセツが増えている。「神々の最愛の者」や「オフルマズドの子」などの付加エピセツに、皇帝イデオロギーの変化を読み取ることができるかも知れない。

更に、諸資料に示されているように、タフテ・タクディース玉座には日月星辰に囲繞されたホスロー 2 世の銅像が飾られ、しかも星辰崇拜か何かの為の天体観測の装置まで備え付けられていたとされる。これは、どう考えても、ゾロアスター教思想の枠内では理解できない構造物である。そして、アードゥル・グシュナスプ聖火と隣接していたのなら、皇帝イデオロギーにとって何か重要な意味を持っていた可能性が高い。しかし、伝説のタフテ・タクディース玉座が具体的にどんなイデオロギーを表象していたのかについては、これだけの材料から推測することは不可能である。

ま と め

本稿は、60年前のヴィカンデルの問題提起を再び取り上げ、「サーサーン王朝の皇帝イデオロギーの象徴の地理的変遷」を主題として始まった。そして、ヴィカンデルから現在に至るまでのゾロアスター教研究の成果を取り入れ、5

⁽⁴⁶⁾ 田辺 1982, pp. 75-77 参照。

⁽⁴⁷⁾ Ostrogorsky 1940, p. 61 参照。

世紀以降に皇帝の参詣地がアゼルバイジャンへ遷った物理的根拠は、アードゥル・グシュナスプ聖火とタフテ・タクディース玉座にあるとの仮説を立てた。

両者に関わる事実・伝説・仮説を集大成した結果、事実性の強弱に従ってクロノロジーが得られた。そして、ここに現れた２段階の変化を貫く法則性として、アードゥル・グシュナスプ聖火に関しては、「ゾロアスター教思想の変容」→「サーサーン王朝皇帝イデオロギーの変容」と云う影響関係を推測できた。即ち、５世紀における、「教祖伝説のアゼルバイジャン化」→「皇帝叙任後の参詣地がアゼルバイジャンへ」、「偶像破壊運動」→「帝権のアイコンとしての磨崖ファッラフ・レリーフの消滅」＋「アードゥル・グシュナスプ聖火の重要性の増大」という影響関係である。

他方、タフテ・タクディース玉座に関しては、ホスロー２世の主導による一時的現象だったようで、ゾロアスター教思想からの影響関係を想定できなかった。こちらは、祖父ホスロー１世の遺産を継承して強大な皇帝権を手中にしたホスロー２世が、軍事的な栄光を背景に、ゾロアスター教神官団から脱却した独自の皇帝イデオロギーを構築しようと試みた痕跡のように考えられる。しかし、資料が極めて乏しいので、それが具体的にどのようなイデオロギーだったのかを特定するまでには至らなかった。

エ ピ ロ ー グ——聖火と玉座の消滅——

623年、シーズの拝火神殿とタフテ・タクディース玉座は、ヘラクレイオスの攻撃によって烏有に帰した。しかし、629年にサーサーン王朝とビザンティン帝国が講和すると、シーズの拝火神殿は国家の総力を挙げて再建され、アードゥル・グシュナスプ聖火も再びシーズに戻された。同聖火は、皇帝イデオロギーの象徴として、サーサーン王朝の支配に不可欠と考えられていたようである。これに対して、ホスロー２世の個人的な創意に発すると思われるタフテ・タクディース玉座は、再建された形跡がなく、やがてその正確な形状すら分からないままに、豪華絢爛たる玉座としての名称だけがイラン人の記憶に残った。

その後、ペルシア・ビザンティン戦争で国力を消耗し尽くしたサーサーン王

朝は、シーズの拝火神殿を再建したのも束の間、アラブ人・イスラーム教徒軍の攻撃によって滅んだ。だが、アードウル・グシュナズ聖火はこの亡国を知らず、943年まで燃え続けたとされる⁴⁸。皇帝イデオロギーを物理的に象徴する聖火の方が、実体であるサーサーン王朝皇帝よりも遙かに長く生き延びたのである。しかし、その後に関する記録はない。10世紀半ばからそう下らない時期に、人知れず消失してしまったのであろう。

参考文献表

- Ackerman, Ph. 1937: "The Throne of Khusraw (The Takht-i-Taqdis)," *Bulletin of the American Institute for Iranian Art and Archaeology*, Vol. 2, No. 2, pp.106-109.
- Boyce, M. 1975: "Iconoclasm among the Zoroastrians," *Christianity, Judaism and other Greco-Roman Cults: Studies presented to Morton Smith*, ed. by J. Neusner, Vol. 4, Leiden, pp. 93-111. (入手の難しい本論文は、川村学園女子大学の山本由美子先生からご恵与頂いた。記して感謝したい。)
- 2001: "GANZAK," *Encyclopaedia Iranica*, Vol. X, pp. 289-290.
- Boyce, M. and F. Grenet 1991: *A History of Zoroastrianism*, Vol. III, Leiden.
- Cereti, C. G. 1995: "Primary Sources for the History of Inner and Outer Iran in the Sasanian Period (Third-Seventh Centuries)," *Archivum Eurasiae Medii Aevi*, Vol. 9, pp. 17-71.
- Choksy, J. 1988: "Sacral Kingship in Sasanian Iran," *Bulletin of the Asia Institute*, 2, pp. 35-52.
- Christensen, A. 1936: *L'Iran sous les Sassanides*, Copenhagen.
- Daryaei, Touraj 1997: "The Use of Religio-Political Propaganda on the Coinage of Xusro II," *American Journal of Numismatics*, Second Series, IX, pp. 41-53.
- 2002: *Šahrestānīhā-ī Ērānšahr: A Middle Persian Text on Late Antique Geography, Epic, and History*, Costa Mesa.
- Der Osten, Hans Henning und Rudolf Naumann (herausgegeben von) 1961: *Takht-i Suleiman: Vorläufiger Bericht über die Ausgrabungen 1959*, Berlin.
- Gnoli, Gherardo 1967: *Ricerche storiche sul Sīstān antico*, Roma.
- 1971: "Politica religiosa e concezione della regalità sotto i Sassanidi," *Atti del convegno internazionale sul tema: La Persia nel medioevo (Roma, 31 marzo-5 aprile 1970)*, Roma.

⁴⁸ イスラーム教徒地理学者ヤーコブ (d. 1229) の報告に依拠した Spuler 1952, p. 190 参照。

- 1980: *Zoroastre's Time and Homeland*, Naples.
- Göbl, Robert 1971: *Sasanian Numismatics*, tr. by Paul Severin, Braunschweig.
- Grabar, O. 1967: *Sassanian Silver: Late Antique and Early Mediaeval Arts of Luxury from Iran*, Ann Arbor.
- Gyselen, Rika 1989: *La géographie administrative de l'empire Sassanide*, Paris.
- Herzfeld, Ernst 1920: "Der Thron des Khosrô: Quellenkritische und Ikonographische Studien über Grenzgebiete der Kunstgeschichte des Morgen- und Abendlandes," *Jahrbuch der preussischen Kunstsammlungen*, Vol. XLI, pp. 1-24, 103-147.
- Huff, Dietrich 1971: "Takht-i Suleiman," *IRAN*, Vol. 9, pp. 181-182.
- Humbach, H. 1967: "Ātur Gušnasp und Takht i Suleimān," *Festschrift für Wilhelm Eilers: ein Dokument der internationalen Forschung zum 27. September 1966*, (hrsg. von Gernot Wiessner), Wiesbaden, pp. 189-190.
- Ibn Khordādhbeh 1967: *Kitāb al-Masālik wa'l-Mamālik*, ed. by M. J. de Goeje, Leiden.
- Jackson, A. V. W. 1914: "Allusions in Pahlavi Literature to the Abomination of Idol-Worship," *Sir Jamsetjee Jejeebhoy Madressa Jubilee Volume*, ed. by Jivanji Jamshedji Modi, Bombay, pp. 274-285.
- 1965: *Zoroaster: the Prophet of Ancient Iran*, New York.
- Jacut 1994: *Jacut's geographisches Wörterbuch*, 6vols, herausgegeben von F. Wüstenfeld, Frankfurt am Main.
- L'Orange, H. P. 1953: *Studies on the Iconography of Cosmic Kingship in the Ancient World*, Oslo.
- Markwart, J. 1931: *A Catalogue of the provincial capitals of Ērānšahr*, Roma.
- Masūdi 1967: *Kitāb al-Tanbih wa'l-Ischrāf*, ed. by M. J. de Goeje, Leiden.
- Minorsky, V. 1943-46: "Roman and Byzantine Campaigns in Atropatene," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 11, pp. 243-65
- 1964: "addenda," *Iranica: Twenty Articles*, Publications of the University of Tehran, p. 109.
- Mohl, J. 1841-42: "Extraits du Modjmel al-Tewarikh," *Journal Asiatique*, 3-12, 1841, pp. 501-18, 3-14, 1842, pp. 113-133.
- Mosig-Walburg, Karin 1982: *Die frühen sasanidischen Könige als Vertreter und Förderer der zarathustrischen Religion, Eine Untersuchung der zeitgenössischen Quellen*, Frankfurt am Main.
- Naumann R. 1965: "Takht-i Suleiman und Zendan-i Suleiman," *Archäologischer Anzeiger*, pp. 619-65.
- Nöldeke, Th. 1973: *Geschichte der Perser und Araber zur Zeit der Sasaniden aus der arabischen Chronik des Tabarī*, Leiden.
- Ostrogorsky, Georg. 1940: *Geschichte des Byzantinischen Staates: Byzantinisches Hand-*

- buch im Rahmen des Handbuchs der Altertumswissenschaft, T. 1, Bd. 2, München.*
- Ringbom, Lars-Ivar 1958: *Paradisus Terrestris: Myt, Bild och Verklighet*, Helsingforsiae.
- Soudavar, Abolala 2003: *The Aura of Kings: Legitimacy and Divine Sanction in Iranian Kingship*, Costa Mesa.
- Schippmann, K. 1971: *Die iranischen Feuerheiligtümer*, Berlin.
- Spuler, B. 1952: *Iran in früh-islamischer Zeit*, Wiesbaden.
- Tabari 1964-65: *Annales quos scripsit Abu Djafar Mohammed ibn Djarir at-Tabari*, 16vols, cumaliis edidit M. J. de Goeje, Leiden.
- TD1 1969: *The Bondaresh: Being a Facsimile Edition of the Manuscript TD 1*, Tehrān.
(本写本のファクシミリ版は、川村学園女子大学教授の山本由美子先生からご貸与頂いた。記して感謝したい。)
- Tha'ālībī 1979: *Histoire des rois des Perses par Abou Mansour 'Abd al-Malik ibn Mohammad ibn Ismā'il Al-Tha'ālībī*, Texte arabe publié et traduit par H. Zotenberg, Amsterdam.
- Warner, A. G. and E. (trs.) 1905-25: *The Shāhnāma of Firdausī*, 9vols, London.
- Wikander, S. 1946: *Feuerpriester in Kleinasien und Iran*, Lund.
- Williams, Alan V. 2002: "Zoroastrianism and Christianity," *A Zoroastrian Tapestry*, eds. by Ph. J. Godrej and F. P. Mistree, Ahmedabad.
- 姜伯勤 (Jiāng Bóqín) 2004: 『中国祇教芸術史研究』, 三聯書店。
- 榮新江 (Róng Xīnjiāng) 2003: 「北朝隋唐胡人聚樂的宗教信仰与祇祠的社会效能」, 榮新江 (主編), 『唐代宗教信仰与社会』, 上海辞書出版社, pp. 385-412。
- 施安昌 (Shī Ānchāng) 2004: 「六世紀前後中国祇教文物叙録」, 榮新江・李孝聰 (編), 『中外關係史 新史料与新問題』, 科学出版社, pp. 239-46。(施安昌, 『火壇与祭司鳥神』, 紫禁城出版, 2005年, pp. 186-199 に再録)
- 青木健 2005: 「サーサーン王朝期ゾロアスター教の神官聖火——アードウル・ファッローバイ聖火の座, X地点の解明——」, 『東洋学報』 87-2, pp. 10-028。
- 2006: 『ゾロアスター教の興亡——サーサーン王朝ペルシアからムガル帝国へ——』, 刀水書房 (印刷中)。
- 杉村貞臣 1969: 「ヘラクレイオス帝のペルシア遠征」, 『オリエント』, 12-3, 4, pp. 87-120。
- 田辺勝美 1980: 「Taq-i Bustan 大洞の重装騎馬像の房飾に関する一考察」, 『オリエント』, 23-1, pp. 65-90。
- 1982: 「ターク・イ・ブスターン大洞彫刻研究——図像学及びイコノロジー的試論——」, 『岡山市立オリエント美術館研究紀要』, 第2巻, pp. 61-113。
- 1985: 「アルダシールⅡ世叙任式図とシャープールⅡ, Ⅲ世像の意義と制作年代」,

- 『オリエント』, 28-1, pp. 93-115。
- 2002a:「王たちのモニュメント」, 『季刊文化遺産13 イラン世界2』, 島根県並河万里写真財団, pp. 18-22。
- 2002b:「王権の造形表現——ターゲ・ボスターン大洞——」, 『季刊文化遺産13 イラン世界2』, 島根県並河万里写真財団, pp. 23-27。
- 本田實信 1976:「イルハンの冬営地・夏営地」, 『東洋史研究』, 34-4, pp. 81-108。
- 1978:「ソロモンの台座」, 『足利惇氏博士喜寿記念オリエント学・インド学論集』, 国書刊行会, pp. 287-301。

ments.

At the Khānaqīn border checkpoint three systems, one of transit permits (*tazkira-yi murūr*), another for medical inspection and quarantine, and a last for customs duties, had been set up soon after the conclusion of the Second Treaty of Erzurum. The systems of transit permits and medical quarantine were newly introduced by the Ottoman government in the mid-19th century, and although Iran under the Qājār introduced the same systems some years after the Ottomans, these systems never reached a point where they were truly accepted by the society at large. Pilgrims from Iran, where the new system was alien, first encountered these systems at the border and personally suffered the deleterious consequences of them. As a result, the stance of the Ottoman government side, which sought to vigorously enforce these rules, and the judgment of the pilgrims, who were critical of the systems, could not be reconciled. This indicates the contradictions that existed between the two parties.

In contrast to experiences in pre-modern times when the conception of national boundaries was unclear, pilgrims in the latter half of the 19th century experienced a strange political system by traveling to a “foreign land”, and thereby obtained an opportunity to reflect on their own identity by crossing over a national border, symbolized by the checkpoint, and carrying a passport to travel in a foreign country. Although such was the case, the gap between ordinary pilgrims and the “modernization” imposed from above was actually quite great. The plight of these figures struggling to cope and in a state of consternation when faced with the “modernization” is highlighted by an examination of the realities of the border checkpoint at the time.

**THE IMPERIAL IDEOLOGY OF SASSANID KINGDOM AND
ZOROASTRIANISM, SEEN THROUGH AN EXAMINATION
OF THE SACRED FIRE OF ĀDUR GUŠNASP
AND THE IMPERIAL THRONE OF
TAKHT-I TAQDĪS**

AOKI Takeshi

This study begins with a reexamination of the research of S. Wikander that was conducted 60 years ago on the geographical transition of the iconography of the imperial ideology of the Sassanian kingdom. The study also incorporates the

achievements of research on Zoroastrianism, from Wikander to the present day, and then hypotheses that the reason that the Sassanid kings moved their place of pilgrimage to Azerbaijan after the 5th century was associated with the sacred fire, Ādur Gušnasp, in Šīz and the imperial throne, Takht-i Taqdīs.

The author has drawn upon evidence from archaeological and written material (in Pahlavi, Arabic, and early-modern Persian) and art historical hypotheses, to create a compilation of fact, legend, and theories on both. As a result, I was able to come up with a chronology based on the weight of the facts. In addition, I sought the reasons for the changes seen in the chronology in light of advances in the study of Zoroastrianism since the time Wikander. As a result the following prospect on the holy fire and the sacred throne were attained.

Firstly, the author conjectures that as regards the holy fire, Ādur Gušnasp, there was a relationship in which “changes in Zoroastrian thought” resulted in the “modification in imperial ideology of the Sassanid kingdom.” In short, there was a chain of influence during the 5th century, from the “linking of the legend of the founder to of Azerbaijan” to “royal pilgrimage to Azerbaijan after the king’s enthronement” to the “iconoclastic movement” and finally to the “destruction of stone relief of Xwarnah, symbolizing the right to rule” and the “increase in the importance of the sacred fire of Ādur Gušnasp.”

As regards Takht-i Taqdīs on the other hand, it appears to have been a temporary phenomenon based on the initiative of Khosrow II, and I am unable to posit any influence of Zoroastrian thought. The imperial throne can be thought of as an artifact of the attempt by Khosrow II, who held a firm grasp on imperial legitimacy inherited from his grandfather Khusrow I to construct his own imperial ideology free from Zoroastrian thought by highlighting the glory of his military exploits. However, due to a lack of detailed records, it was impossible to specify just what the nature of ideology that might have been.